

実践まとめシート（２年次）

研究グループ	地域と協働	実践グループメンバー	三浦、三橋、對馬、棟方、大塚、矢口
--------	-------	------------	-------------------

実践タイトル	
「藍染めワークショップを開こう」（中学部 作業学習）	
I 問題と目的	
1 生徒の実態	<p>中学部生徒にとって、人とのつながりはとても狭いものとなっている。それは、多くの生徒が実際に関わっている人が、家族、親戚、学校、放課後等デイサービス等にとどまり、自分の生活する地域に出ていく機会が多くはないことが考えられる。ただ、学校内での生徒の様子としては、友達同士で良好な関係を築けていることが多く、密な関わりを継続することがそういった関係性を築いていくために必要である。また、友達同士で思ったことを話したり、面白かったテレビ番組について話したりする様子は見られるが、学級活動などで話し合いの場面になるとなかなか意見が出なかったり自分の意見を押し通そうとする様子が多く見られる。多くの生徒が「相手に適切に伝える力の伸長」を教育支援計画の長期目標に設定しているため、その力が身に付くことで、自分の周りの人々とよりよい関係性を築くことにつながり、地域に対しても視野を広げていくことが期待される。</p>
2 実践概要について	<p>・ R4年度の実践では、中学部農工班（１年２名、２年３名、３年３名）計８名の生徒が作業学習において継続して取り組んできた綿の加工作業（糸づくり、搾油、種と綿の分離作業）を、附属小学校の児童４７名（複式学級１～６年生）へ教える活動を行った。学習後のアンケートでは、作業学習への意欲が高まったことや他の人へもっと伝えたいといった意見が多かった。自分たちが作業学習で学習してきたことを、他者（地域）に伝える活動は、結果として生徒の作業への充足感や学習への意欲を高め、地域（他者）とのつながりを広げることができたと考える。</p> <p>・ R5年度は、昨年度の実践の工程を参考にしながら、作業学習に関わる内容を、他者（地域）に伝える活動を行うことで、生徒の作業学習への意欲を高めるだけでなく、主に他者へ伝える力を伸ばし、地域（他者）とのつながりを広げていきたいと考えた。具体的には、生徒が調べ学習や外部講師による授業、染め物教室等で染色方法や模様の付け方を学び、それを友達や小学部児童、幼稚園児に伝達するワークショップを開催する。この学習を設定した理由は、この学習を行うことで他者へ伝える力を伸ばせることが期待できるとともに、昨年度同様に作業学習に対する取り組み方の変容も期待できる。そして、中学部生徒は自分たちの地域に関する学習に取り組んでいるため、生徒の地域への意識を広げることで、今後の地域の学習についてもより広い視野で物事を考えていくことが期待できる。</p> <p>・ こういった力を継続して高めていくことで、卒業後に就労し、地域の人々と関わりながら生きていくための素地が培われていくと考える。</p> <p>・ ここで、「地域」という概念について、本研究では現代社会の多様な在り方や、場所にとらわれない、様々なネットワークでつながり合う人間関係を考慮し、「地域」を、構成要素である「生徒本人」と「他者」とのつながりの深さ、その広さにとらえた。よって、関わる人が多いほどその生徒にとっての地域は広がっていくと考える。また、生徒本人にとっての地域の人と、同じ目的のために協力することを、「地域との協働」と定義付けた。</p>

Ⅱ 実践方法

1 対象生徒・学級・学習グループについて

中学部では、弘前大学、附属学校園、地域との交流及び共同学習を推進し、様々な人たちと協働することで、相互に豊かな人間性やコミュニケーション能力の育成を図ることを目指している。対象の生徒は、中学部1年生2名、2年生2名、3年生2名の計6名とした。それぞれ3か年の個別的教育支援計画の目標の中にコミュニケーション面の特に相手に適切に伝える力に関する目標が設定されている生徒を対象とした。

2 実践の手続き

本校中学部の作業学習では、農工班と手工芸班に分かれ、それぞれの作業に取り組んでいるが、互いに協力しながら製品開発を行っている。具体的には、農工班で栽培した綿花で糸を作り、それを手工芸班で生地にし、鞆等の製品を生産している。また、農工班で育てた藍の葉を使って糸を藍染めし、それを生じた製品作りにも取り組んできた。今回の単元では、二つの作業班が連携した製品作りの一つとなる藍染めに取り組み、その手法を他者に教えるワークショップを開くことで、作業学習そのものへの意識を高め、地域（他者）とのつながりを拡大し、更には他者へ伝える力の伸長を図りたいと考えた。意欲喚起のために地域人材の外部講師を活用したり、生徒同士が協働したり振り返ったりする場を連続的に設定することで、相乗効果的に良い成長のスパイラルが生まれることがねらいとなる。

効果の検証では、授業後の生徒へのアンケート調査結果の比較、ワークショップ時の生徒の発言内容や行動の見取り、単元内での生徒の言動の変容、授業中のエピソード記録などの検証を行った。

Ⅲ 指導の実際

単元構成としては以下の8つの工程で実施した。

①染め物の調べ学習
②外部講師から、藍染めについて教わる
③藍染めを实践
④藍染めワークショップの準備（役割分担、相手を意識した教え方）
⑤小学部児童に、藍染めワークショップ①、振り返り
⑥附属幼稚園児に、藍染めワークショップ②
⑦グループごとに本単元で学んだことをまとめる
⑧まとめ発表、単元の振り返り

単元構成としては、まずは自分たちが今後作業学習で取り組んでいく染色についての調べ学習を行い、その後外部講師を招き、藍染めについて詳しく学ぶ機会を設定した。これにより、藍染めについての興味・関心が高まり、この後自分たちが実際に行う藍染めへの意欲喚起につなげたいと考えた。まず事前学習で藍染めに取り組んだ後、自分たちが学んだ知識を生かして小学部の児童へ藍染めの手法を伝える藍染めワークショップを開くことを伝えた。また、藍染めの模様付けの技術的な部分のみではなく、どのように伝えれば相手に上手く伝わるかについて、生徒同士での話し合い活動と、練習活動を設定した。そして、小学部児童への藍染めワークショップを実施し、そこでの成功体験で得た自己有用感を活用し、小学部児童よりも関わりの少ない附属幼稚園の園児への藍染めワークショップ②を実施することとした。小学部児童へのワークショップ後には振り返り活動を設定し、次回どのようにしたらより良くなるかを話し合い、共有した上で教え方練習し、幼稚園での藍染めワークショップ②に臨めるようにした。藍染めワークショップ②では、附属幼稚園を訪問してワークショップを実施し、幼稚園児と触れ合いながら教えられるようにした。本単元で

最も大事にしたことは、活動後の生徒同士の話し合い活動であり、このことが生徒間で考えを広め、深められることにつながると考えた。単元最後には、本単元を通してうまくいったこと、難しかったこと、気付いたことなどについて各グループで話し合い、そこでの気づきを中学部全体で共有する発表会を設定した。発表会後には各グループでまとめの学習をすることで、自分の考え、自分のグループの考え、他のグループの考えを知った上で話し合うことができ、より考えを深め合うことができた。

Ⅳ 結果

- ・生徒にとっての地域（他者）とのつながりは広がったかについては、授業後のアンケートで自由記述項目の「誰と一緒に染めてみたいですか」への記述内容を分析（グラフ1参照）したが、単元前半と後半を比較してみても多様性の広がりには特に見られなかった。これについては、生徒にとっての地域（他者）の広がりをこの項目のみで判断することが難しいこと、地域（他者）の広がりは簡単に広げることが難しいということが考えられる。そして様々な要因によって変化していくため、保護者への聞き取り、普段の会話の見取りなど、細かな検証が必要なのだと考える。ただ、小学部児童へのワークショップを予告した6月20日、幼稚園児へのワークショップを予告した6月27日のアンケートでは、それぞれ小学部児童、幼稚園児の項目が初出していた。これは、ワークショップ予告をきっかけとして地域（他者）への視野が広がったと考えることができる。

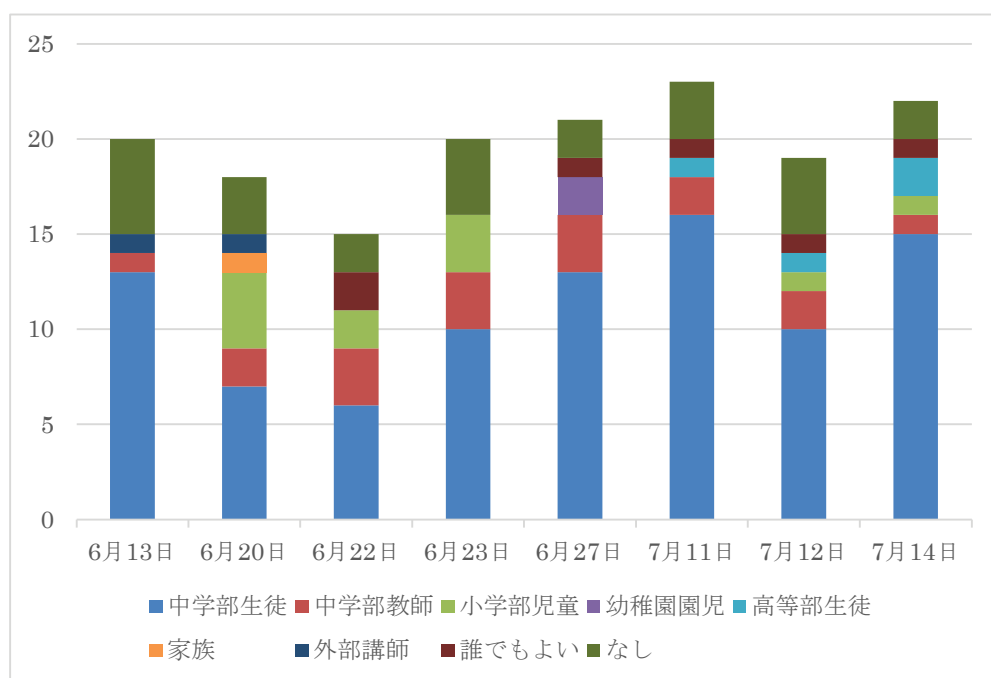


図1 「誰と一緒に染めてみたいですか」の質問に対する回答

- ・外部講師の活用における教育的効果については、外部講師の授業後に生徒にアンケート調査を行い、分析した。分析対象は、自由記述「感想を書きましょう」の項目から、アフターコーディングで回答内容について分析した結果、有効回答全てがポジティブな回答であり、学習に主体的に取り組んでいたと分析できる。つまり、本事例では、外部講師の活用によって生徒の主体的な学びへつなげることができたと考えられる。具体的な内容としては、次の学習への抱負、外部講師から教わった活動時の注意点や授業内容が多くを占めていた（表1参照）。つまり、生徒が外部講師による授業に進んで参加し、次時への意欲を高めることができたと考えられる。

表1 外部講師による授業後アンケート「感想」より（一部）

記述内容（一部）
<p>【次の学習への抱負に関する記述】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 勝川先生の説明がとても分かりやすかったです。丁寧に教えてくれてやってみたいと思った。 ・ 火傷しないよう集中して頑張ります。 <p>【外部講師から教わった活動時の注意点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 今日勝川先生がきて、説明を聞いて大事なところは何回もやけどに注意がと書いてあったので、私もやけどに注意します。 ・ 水でよく洗う、目に入らないように保護グラスをして、手が染まらないようにする、やけどに注意する。 <p>【外部講師から教わった授業内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ やり方が3種類あること、藍の青汁があることが分かった。

- ・ 生徒の伝える力がどう変容したかについては、アンケート調査を基に分析した。対象は、自由記述「教えるときに気を付けることはなんですか」の項目で、藍染めワークショップ1回目の前と、2回目の前に行ったアンケートをテキストマイニング分析で比較した結果多く抽出された言葉をそれぞれ10個ほど取り上げたものを赤で示したところ、図2、3のようになった。

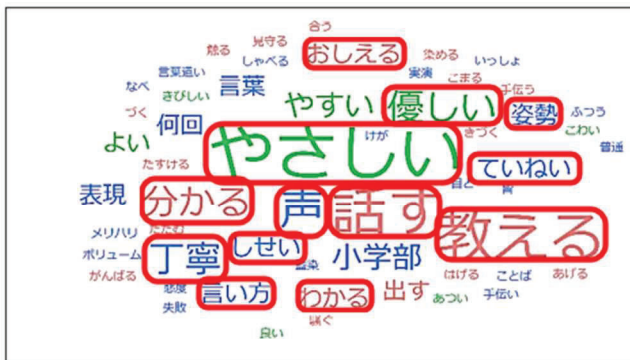


図2 藍染めワークショップ①前

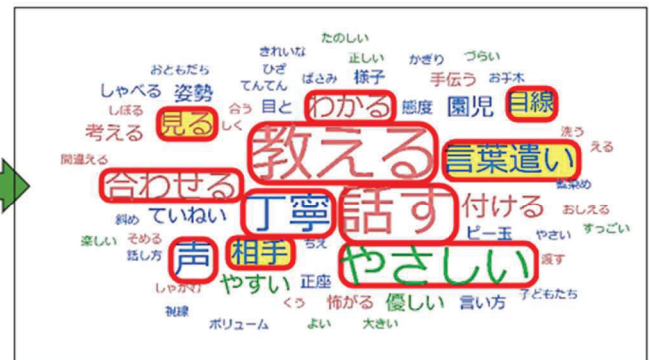


図3 振り返り学習後

黄色の部分について、振り返り学習後には「相手」「見る」「目線」「言葉遣い」という項目が新たに出てきた。これは、「丁寧」「優しい」といった話し方を目指していた生徒が、ワークショップの振り返り学習を行った結果、より具体的な伝え方を考えたことによって変化したと考えられる。この結果から、伝える経験を重ねたことで、生徒の伝える力の伸長を図ることができたと考える。では、実際場面ではどうだったかを対象生徒 A、B の当日の様子やアンケートから読み取れる内容を検証した。

対象生徒 A は、「相手を見て話す」ことを目標設定してワークショップに臨み、振り返りで本人は「できた」と話していた。しかし、当日の動画を見てみると、園児のいる方向に目を向けながら覚えた台詞を話していたが、実際には園児の目は見ていなかった。本人もそのことに気づき、どのようにすればよかったのかを友達と話し合い、「相手を見る」とは、具体的には相手の目を見るということ、また、場面によっては相手が一人とは限らず、複数人いる場合もあるため、その場合には聞いている複数人の人の目を見る必要があるという気づきにつながった。その後の発表会では、中学部生徒の前でしっかりとそれを実行しようとする様子が伺えた。また、アンケートへの記述内容では、ワークショップ前は「相手を見る」と書いていた記述が、ワークショップ後には「相手と同じ目線の高さで話す」と変化し、伝える力がより実際

場面を想定したものとなったと考えられる。

対象生徒 B は、「相手に分かりやすく伝える」ことを目標に、1 回目のワークショップに向けて藍染めの説明内容と台詞を考えた。説明内容と台詞は、教師や友達と話し合いながら作成した。話し合いから、一文の台詞の長さが短い方が理解しやすいことに気付き、説明する台詞が短くなるように話す内容を整理した。1 回目のワークショップの振り返りから、台詞とは別に「困っているときには自分から手伝う」ことを2 回目の目標として掲げた。2 回目では、困っている園児に自分から手伝う場面が見られ、染め液に布を入れるときに、「ポチャン、とならないように」と染め液が飛び散らないことを、園児が分かりやすい表現で伝えることができた。園児の前では、一つ一つの動作を、短い言葉を使って説明し、園児と一緒に作業を進める様子が見られるなど、相手の状況に合わせて臨機応変な対応ができていた。2 回のワークショップを通して、「話をまとめてから話すことは難しかった。上手にできたかは分からないけど、一緒に染めることができて、(自分の中では) うまく教えられたと思う」と感想を述べ、相手に伝えること、教えることへの成功体験ができたと考えられる。また、今後の生活では、分かりやすく伝えるために、相手の目を見て優しく話すことを日々練習する、と新たに目標を立てたことから、客観性、他者視点が強化されることにつながったものと考えられる。以上のことより、対象生徒 A、B ともに伝える力の幅が広がったと言える。

- ・ 今回の単元で十分な協働ができたかということについては、調べ学習の内容を学級ごとに分担してそれを共有したり、ワークショップにおける自分の役割を果たしながらワークショップの成功に向けて取り組んだり、振り返り活動ではワークショップをよりよくするにはどうすればよいか話し合ったりした。どれも生徒それぞれが同じ目的のために力を合わせて取り組むという私たちの「協働」の定義に合致している。また、外部講師の方から藍染めについて学び、良い藍染めを目指すという点でこの活動も協働と考えることができる。中学部生徒にとっての地域は、同じ中学部の友達や、協力的な方といった割と近い人達との関係で本単元の「地域」は成立していた。近い関係性ではあるが、その地域と協働することで、自分の力以上の成果や気付きを得ることができたと考える。そういった対話を通じた協働が「相手に伝わるという確かな経験」として、生徒同士の対話を通じた活動、ワークショップでの他者に伝える活動を行ったことで、相手の身になって考えたり、誰かの役に立つ喜びを実感(自己有用感)したりする機会とすることができた。これは生徒にとってのキャリア発達につなげることができたと考える。
- ・ 単元構成による成果と課題について、2 回目のワークショップの設定は、生徒たちにとって、一度成功させることができたワークショップをもう一度行えばいいんだという思いから前向きにとらえていることがその場での発言やアンケートよりうかがえた。ただ、実際に園児たちにワークショップを行った後のアンケートでは、難しかったという感想を書いている生徒もいた。これは一度目のワークショップから期間が開いてしまったこと、慣れない場所で相手も初対面だったことで緊張してしまったことが要因として考えられた。これは伝える力が、ある程度指導を継続することで身に付いていくものだとも考えることもできる。もし2 回目のワークショップまでの間に練習の機会を十分に確保していれば、更に大きな達成感や自己有用感を感じることができたのかもしれない。そして本単元の最後に設定したのが、二度のワークショップでの様々な気付き、達成感、反省等についてグループ内で話し合い、中学部全体場で共有する発表会である。ここでも自分の気付きを友達と共有することで、多くの学びが生まれた。発表会では、相手に伝える際の技能的なことだけでなく、日常生活場面で日々練習していくことが大切であるということを全てのグループが発表していた。これは今後の作業学習だけではなく、将来につながる学びとなったと考える。

以上のように、本実践は、生徒の主体的・対話的で深い学びの視点を踏まえた授業であり、生徒のキャリア発達を促すことにもつながったと考える。

V 考察と課題

今回の大きなねらいとして取り上げた伝える力については、生徒の成長を感じられる多くの場面があった。これは対話による十分な振り返り学習が効果的だったと考えることができる一方で、全員がすぐに身に付けられるものではないことも明らかになった。また、友達同士での対話を通した振り返り活動で考えをまとめたり進めたりすることができた一方で、教師の言葉掛けがあっても難しい場面が多く見られた。これは障害特性によることが考えられるが、まだまだ認知的な段階として難しい活動であったと考える。適切なやり方が分かっているにもかかわらず実際の場面でその力を発揮しきれないこともあるため、より実践的な対話的活動を継続して実施することが重要だと考える。

本研究では、生徒同士の話し合いを中心とした活動に重きをおいたことにより、自分の気付きだけではなく、他者の気付きも自分ごととして考えられるようになり、それが生徒のキャリア発達を促すことにつながった。中学部生徒にとって地域（他者）との協働は難しいことが多かった。これは、中学部生徒が、地域とのつながりそのものが弱かったこと、対話で思考を深め合う経験が少なかったことが考えられる。今後、生徒にとっての地域（他者）を更に広げていくためにも、こういった地域（他者）とつながる協働学習を継続し、少しずつ社会や将来の生活につながるような、生きて働く地域を築いていけるように進めていきたい。